

真 生

第五卷 第三號

◆一時見佛と云ふことが世間にさわがれたことがある。然に近頃は殆どそんな話も聞かないかの有様である。乍然それは喜ばしい現象であらうか、私には何となく物足らぬ感さへしてならぬものがある。

◆見神とか見佛とか云ふことは宗教の眞諦としては最も正しい、又最も大切なことである。たゞ私共の憂ふる所は所謂世間の幻影的見佛の迷妄である。

◆從て眞實の意味での見佛は即ち其の人にとつてなくてはならぬ重要な問題であり、又眞實の宗教に入る一つの重大なる關門である。

◆世に神を見ずして神を信じ、佛を見ずして佛を知ることがどうして出来るか。嚴密な意味での入信は即ち神を見た證據であり、佛を見た證據である。神を見ることがよつて神を信じ、佛を見ることによつて佛を知ると云ふことが眞の宗教の事實ではないか。

◆然らば神を信じ、佛を信じたことと云ふことは言換へれば神を見、佛を見たことと云ふことである。

◆乍然ことに神と云ひ佛と云ふは決して單なる色相の佛ではない。色相の佛は更に其の底に絶對無限の無相の大慈悲を滯せるもの、姿である。

◆さうして亦眞に佛を見るものは同時に亦自己の佛性を見るものでなければならぬ。否此のことは見佛と同時に眞性の事實が顯はれて來るのであるが、それはやがて理想實現の眞生の自覺とまでなつて顯はれて來るのである。

◆佛子の自覺とは即ち見佛の自覺であり正覺への自覺である（念

鴉い無のひろくつ

法然上人に目のあたり接した俳諧師鼠禪が、上人のことを
なく聲につくろひもなき鴉かな
と評した。評したのではない、嘆じたのである。
□産まるべきものを、つくろひもなく産むといふ己外に宗教も俳諧もないといふことを味
てゐた鼠禪には、此のつくろひも無い聲の法然上人を仰いた時、何とも云ふにいへぬ強い
感銘を受けたことであらう。
□百舌鳥は他の鳥の啼き真似ばかりしてゐて、自分の啼き聲を忘れてゐる、忘れてゐるば
かりでなく失くなつてゐる。それよりもあのカア／＼と云ふ不粹な鴉の啼き聲の方が、ご
れ程親しみ深いか知れぬ。鴉のなき聲を鴉の啼き聲として、味ひ得る人でなくては念佛は
わからぬ。
□念佛がわかつてゐた鼠禪にして此句が詠めたのであり、此句が詠めた者にして廣い「つ
くろひの無い世界」が味はれるのである。此誠偽りのない開け放しの彼を見、我れを見た
とき、初めて生きることの爽快さを感じる。さもない時は皆な、重々しい黒ずんだ、地獄
道であり、餓鬼道であり、修羅道である。
□私たちは此のつくろひの無い姿にならうとして、却てつくろひに陥てゐる。哲學も道德
も藝術も宗教も此のつくろひの無い生活に生きやうとしての惱みである。今や惱んでゐる
ばかりでなく一氣に突込まねばならぬ時である。
□眞實の生活とは何か、それは難しいものでも何んでもなく、唯「正直」になるといふこ
とである、正直になるといふのは黒いものが白くなるやうに思ふが、さうではなく、皺の
よつてゐる紙がピンと伸びるやうなものである。(尅子)

目次

- ◆つくろひの無い鴉 尅子
- ◆眞生同盟に就て 土屋 觀道
- ◆弓を引く人 中野 善英
- ◆國民の自覺 意 喜知
- ◆別時結衆芳名録 眞野志岐雄
- ◆吾友だより
- ◆眞生同盟趣意

年毎に咲くや吉野の山櫻

木を割りて見よ花の在りかを
櫻の大木のごこを刻んでも、花らしいものは一辨も
出て来ぬ、出て来ぬ處からイザとなれば美しい花が房
々と實のる。すれば幹の何處かに在る譯だ、だが年中
咲いて出ぬところを見れば幹の中ばかりに在るのだ、
ないらしい、矢張り「春」の中に花はあるのだ、それ
ではその「春」が何處に居るか、ごこにも居らなくて
何處にも居る、而かもその春の中から百萬の花を咲か
して来る。

闇の夜に啼かぬ鴉の聲きけば
生れぬ先きの父ぞ戀しき

一切のものを産んで下さつた親こそ、目にも見えぬ
闇の中の鴉である、暗の中に自由に飛び廻つて啼いて
ゐて下さる此親様こそ、萬物の根源である。
私たちが惱煩の梓棒にも菩提の花が咲く、我慾の丸太
にも他愛向上の花が咲く咲かすのは正しく如來の力で
ある有りそうにも思はれぬ中から如來のみ心が芽ぐむ
それは如來他力の中に在る證據である。
一切を生かして下さる本源が嚴然と闇の中に在ます
此本尊が戀しくてならぬ、慕はしくてならぬ。それは
我々の親さまであるからである。此如來さまに歸命せ
すには居れぬ。歸順せず居れぬ誰か親なくて生き得
る事が出来やうぞ。(尅子)

眞生同盟に就て

土屋 觀道

(一)

眞生同盟とは眞實の生活を自己自身の上に實現せんとする生活の同盟であります。謂換れば佛としての生活、神としての生活を自己自身に實現せんとする生活の同盟であります。眞人として生き活きて住く所の外に宗教も哲學もないのであります。

私共の慾求は之を擧ぐれば數限りもありません。乍然之も亦詮すれば眞生の外何者もないのであります。眞生とは眞實の自己に生きる事であります。我等は生けるもの、どこまでも衰滅を欲しません。そして又どこまでも『よくなりたい』と云ふのが私共本心の願いであります。

『死にたくない』とは即ち不滅の要求であります。不滅の要求とは不死の要求であります。永生の道を尋ね、不滅の世界を求むるのは此心ある人々の自から求めて止まぬ所の願いであります。

私は此の二つの欲求を私の生活の上に發見し、又此の二つを一切の生物の上に發見しました。謂換れば自己生命の保存と生活上の發展とは一切生物の根本的要求であります。それが何の爲めの欲求であるかは私は知りません。乍然それが何の爲めの欲求であらうかは知らないけれども、此の二つの欲求こそは私共生活の一切の中心でないかと思ふのであります。

尤も中には一見すればそれが反つて、死を要求し、又何等向上の心も起らないかに見ゆる場合も時には

無いことはありません。否かく云ふ私自身の生活の上にはあまりに疲れ切つた場合にはもう生くるのさへつらくて何等向上の心も起らず、又生きやうと云ふ願さへ無くなつて寧ろ死を求むる時がないのであります。乍然かゝる場合にも私共の本心はやはり死に度くないのが眞實であります。従つて死にたいなどの要求は生きんとする生活の苦しみに堪へないもの、死によつて得んとする安樂の願ひから起つて來た一種の變態であります。従つてそれは決して生けるもの、正態ではないのであります。又向上の心も起らなくなると云ふ場合もあるが、之は單なる向上の努力に伴ふ努力の疲れに堪へずしてこの疲をさげんとする向上心の變形に過ぎません。従つて此の二者も亦永生と向上との二慾求から來た所のものと見る事が出来るのであります。佛教に所謂佛陀とは此の自覺に目醒めた人を云ふのであります。宗教の理想も此の二つの自覺に外なりません。

(二)

然ば不死の自覺とは何であるか、永生の要求とは何であるかと申しますれば自分自身の生命が如來の大生命と一であり、不二であるとの自覺であります。如來の生命は一切の生命の根源であり、全體である。而て如來の生命は永遠であり、不滅である。此の永遠にして不滅なる如來の生命の外に一切の生命はない、天も地も我も人も皆如來より來る。而て是等は皆一體である。而て此の一體の現れが一切であり、萬法である。従つて万法の外に我なく我の外に萬法はない、自他一切万法不二である。此の不二の萬法が宇宙と一體にして不生不滅不増不減である。又不去であり、不來である。従つて一切の生滅増減は單なる宇宙の波動に過ぎぬ。而て我も亦其の中の一法である。然ば万法の不滅なる所我も亦不滅で

あり、萬法の不死なるところ我も亦不死である。そこに即ち不死不滅の自覺あり、永生長達の目醒めがあり。

次に價値の生活とは何であるか、それは宇宙の理想を吾人の上に實現することであり、私共の生活には其の形こそ違へ、松は松、杉は杉にして、各々其の眞實の世界があるやうに、私共の人生には各人各異の天分の生活があるのであります。謂換れば私共は人生の模倣をせずして、眞實の自己に生きればよいのであります。

然ばどうして私は今日此の考へにまで到達して來たかと申しますれば、初めは私の生活も動物的生活の時代であります。これは確に私共の生活に於て一大自覺を要する所の時代であります。所謂肉慾的生活の時代であつて恰もそれは動物共通の食慾と色慾の時代とでも申しませうか、此の外にも名譽とが金銭とか或は其他色々の慾求も種々起るには相違ありませんが、それらは要するに此の肉慾と性慾の補助欲求に外ならぬかに見えます。

然に私が小學の時代から中學の時代にかけて著しく變つて來たのは人生の意義についての疑問であります。人はいつまでも生るものではない又いつまでも生てゐると云ふことのみが決して尊い人生ではないそこには永劫不死の自覺よりまたなき尊き人生の眞の生活に進まねばならぬと之が私の願ひとなりました。尤もかゝる要求は小さい時から私にも多少無いではありませんでした、乍然眞に人生の意義を考へ深く永生の道を思ふやうになつたのは正しく工業學校在學の二三年頃からであります。肉慾の生活も此の世に生きる限りに於ては無くてはならぬものでありませう。そして又いつも貧困の中にのみ育つ

た私としては金錢の必要も人一倍に感せずにはゐられませんでした。乍然靜に人生を考へて人生僅に五十年やがては一切が此の世から離れねばならぬのだ、人は確に一度は死と云ふものが來るものだとしみじみと感ずるやうになりました。或は、死の後に來るものは何であらうか、死の前に於ける何故に人は死ぬものが、死の後に來るものは何であらうか、死の後に來るものは何であらうか、死の前に於ける今日の人生が抑も何を意味して。肉慾も性慾も財産も名譽も一として死の前に意義を有するものとはないと、之が私の今までに於ける人生の一大轉換の時期であつたのであります。

三

然に我とは何ぞや、我とは此の五尺の我にあらずして、眞實の宇宙と共なる永生の我である。本來不滅の人生であると知りましてからは、正しく私の生活は其の根本より一變せざるを得ませんでした。而も此の時の喜こそは實に私が生れてからの眞の喜びの初めでありまして、又永劫に記念すべき人生の最大自覺であります。今や私は單なる人としての私では無くなつて、正しく宇宙の一員であり、宇宙と共なる私である。宇宙の外に私なく、私の外に宇宙はない。一切の萬法はそのまゝが宇宙の顯はれであり宇宙生命の表現である。従て我等の生命は直に宇宙生命の一部を爲し、宇宙不滅なる所我も亦不滅である。従て宇宙の理想は直に我等の理想であるといふことになつたのであります。

乍然果して宇宙は永遠なものであらうか。又果して宇宙は不死不滅なものであらうか、そして又此の宇宙はそんなに靈的なものであり、理想を有するものであらうかとは疑へば疑へないこともありません。いけれども、私の信じ得たところによれば、宇宙は萬物の入れものとしての一大宇宙でなく寧ろ時間も空

間も遙に超越した一大生命其のものとしての永劫より永劫に活動止まざる靈態であります。而もそこには又それがたとい人間のやうな單なる意識理想ではないとするも私共の理想をも包括した更にそれよりも一層高き宇宙の理想があることを信せざるを得ないものがあります。吾人意識の本源としての一大活動の大根源が人間のそれよりも更に大なるものとして實在することを信せざるを得ないのです。その世界こそは實に永遠その世界であり、常住の世界であり、又絶對の世界であつて寧ろ永遠と云ふよりも更に永遠そのもの、世界であります。否宇宙の一大生命こそは其の生命そのまゝが一切の時空を超越した所の絶對であつて寧ろ之によつて無限も知り、亦有限も知りうるものであります。従つて私共に價値の生活として其の價値を自覺し得ると云ふことも此の生命の生長發展によると云ふ可きです。

而も此の宇宙には私共の力以上の一大力が天地の間に漲つてゐる。而て其の力は單なる物質的力のみは云はれない。寧ろ物質力をも包括した一大力であるに共に、私共の精神力のそれまでをも包括した力であります。即ち宇宙の絶對威神力とでも申しませうか。此の力が一切の力の根源であり、此の力の上には如何なる力をも出ることができぬのであります。而て此の力が一切の上に働いてゐることは一切のものがそれを知ると知らぬとに關係はありません。

又此の力は一切の上に宇宙の一大法則として秩序整然と現はれてゐるのであります。私共はそれが如何なる法則のものによるものであるかは初めから之をよく知ることができません。乍然此の絶大なる宇宙の力は實に一切の物質的精神の一切の力の根源であると共に又研究すればするほど一として整然なる自然の法則ならざるはないことを見るのであります。而て此の法則も亦私共の知ると知らざるに

かゝはらず、一切は皆此の法則の許に行はれてゐるものであるとほかに信することができぬのであります。尤も私共には一面意思の自由と云ふものがあります。乍然よくよく考へれば此の意思の自由と云ふことも亦此の天地の法則を離れて自由であると云ふのではありません、否意思の自由と云ふことは寧此の天地の法則に向つて眞に生きやうとするの力の働きであることさへ私には言はれます。即ち天地にはそれほどの宇宙の法則が到る所に充ち満つてゐるのであります。凡て天地間のもの一として此の宇宙の法則を外にして存在するものとはありません。此の他更に私共に重要なものは宇宙の恵みであります。山川草木靜にながめ來れば一として宇宙一部の存在ならぬはなく、山川草木之また宇宙の恵みなくしては存在することが出来ないであります。此の宇宙の恵み、宇宙生命の一大恩恵と云ふものは普通の人的恩恵とは餘程趣きを異にしてゐるものではあります。一切の萬物一として此の宇宙生命の力と法則のもとに生き活かされてゐないものとはないのであります。靜に人生の一生を考察すれば寸時として私共は此の宇宙の力と法則と恵みとの三大龍恩の世界に養育せられてゐない時とてはないのであります。而も私共が此の事を知ると知らぬとにかゝはらず、天地は斯くの如くして私共を永劫に生かし活して往くのであります。而も此の事を私は如來の御力と御恵みとによる働きと云ふのであります。而も私共の智情意の三面が宇宙の眞善美に相當して發展して往く事は要するに此の力と法則と恵みとの生活に一致することに外なりません。尙此の言表し方がまづければ私共は宇宙の本源たる如來より生れて此の土に來たものであるからして、即ち如來の子供である。従つて私共は如來のまたなき御恵みの中に保み育てられて如來の如く完全に進まんとする理想に生けるものであるとも云へるのであります。

乍然友よ、私の是の信仰は一朝にして此の所まで来たものではありません。そして又初めからこんなことが私に判つて居つたものでも尤よりのないのです。否寧ろかゝる私の信仰は念々刹々の中に日夜に進轉して今や今日の所にまで到つたものである。従つて私が人生の意義を只た眞生の一にあると深く自から覺つたのも亦決して一日にして之を得たものでは無いのであります。否少くともそこには入信以來正に十有餘年を経過したことを覚えてゐます。而も今日斷然として此の眞生を發表し得るに到つたことは更にそれより約十有一年を経た後のことでもあります。

宗教と云ひ、哲學といひ、或は倫理道德と云ふも其の名違なれど要するに、そは人類が正に眞に生きるんとするの半面に外なりません。眞生は實に人生の生活目標の中心であります。

今私が眞生同盟をこゝに提唱するに至りましたことは、實に此の宇宙生命の發現でありまして、單なる私人の發起ではありません。従て其の眞生の自覺たるや正に一切を擧げて此の眞生の自覺より、一切の生活を理想完成に至らしめやうではなからざるかとの自覺の上から實際生活にまで現はれて来た同盟なのであります。従つて従來の宗教や哲學若は倫理道德は私共の眞生同盟から見ますれば凡て之等は此の同盟への前提に過ぎぬのであります。従つて今や私共の眞生同盟は宇宙の眞理に生きやうとする生命の叫びであり、又生命の躍動であります。故に一面には如來の大悲の中に、はぐぐみ育てられて絶對慰安の中に生長しつゝ、限りなき永遠の望みと喜びと力との理想實現の生活であります。

□弓をひく人

△弓を引いて先づ矢を放つ、的の上飛びをして仕舞ふ。しまつたと思つて又放つ、手前へ落ちる。是ではならぬと又放つ、右へ行く、左へ行く、其の内に初めての的の片端へ中に入る。少々手加減が解つたから其調子を量つて又放つ、外れる、中る、中る、外れる、と回を重ねて行くに従て呼吸がわかつて来る。

△此呼吸を以てすれば最早や矢が弦を離れて的に中らぬ前に中不中が解るやうになる、ハツと云ふ一瞬に天地が一度に射破られたやうな氣がして、その後にはボンと靜かに的を射つた音を聞くやうになる、本當に矢頃が決つて来る、眼を瞑つてゐても中たるやうになる、それと反對に眼を開いてゐても中らぬ時は、中らぬ前に既にわかる。

△名人が的に向ふと何麼小さな金的でもお月さんのやうに大きく光て見え、それがだん／＼手前へ歩いて来るそうだから、其れに射込む事位いけ何の

雜作も無いそうだ、本當にそうだらうと思へる、それが我々には立木から人間の頭、矢場に落ちてゐる蜜柑の皮まで見えて、的が小豆粒位になつて仕舞ふ、だから中らぬのも無理はない。

△中らぬ前には當てた手心といふものが無いからさつぱり見當がわからぬ、唯だ人の振りを見たり話を聞いて眞似てゐるだけだから中らぬのも無理がない、それが一度中てると此度は自分が中てたのだから手加減といふものがよく解つてゐる、それで其次からは人の話よりも自分の經驗を基礎として進む、だから二度目の中りは早い。

△信仰も此の弓引きと同じである。
△初めは佛とか、神とかと聞いても人からの話であり、指圖であるから、解つたやうでも解らぬ、實際上の場合になると少しも力にならぬ、即ち信仰と自分とが離れ離れで、自分とは没交渉である何だか理想的に聞へるものが其實空想的に思はれて雲の上の音楽を聞くやうな氣がする。即ちいくらやつて見ても中らぬといふ現實があるばかりで信仰線圏外に抛り出されてゐるやうなものであ

る。

△だから講話を聞いても、寺へ詣ても、念佛しても、座禪しても、祈ても、何ともない、却て馬鹿らしくて砂の中を掻いてゐるやうなものだ、而し何だか其中に何か有りそうにも思へるから止めて見る氣にもなれぬ。

△それが一度的に中たると、人の話は話だが「此れ丈けは斯う考へずには居れぬ」と云ふ一の基點になる信念が出来上る、此の主張だけは教へて貰つた考へでないから何と云はれても引げぬ、此體験體證が基礎となつて其次の中りを生ずる、第三第四とだん／＼中心に近い中りとなつて来る、それと共に此等の信念を統一した信念といふものが太て行く、そして自己といふものの内容が肥て來佛とか神とか云ふ名でも發表せられるやうになる。そして終には中てずに措かうとしても自然に矢が中心を射るやうに、信念からなくては發せず居れぬやうになる、信念そのものの佛そのものから外れて生きる事が出来なくなつて信そのものが我れとなり、我れそのものが信となる。自分が

便宜上背負てゐる信念でもなく、又信念に背負はれ、佛に背負はれて自分を辯護してゆく信念でもない。

△ここまで來ると「佛」と云ても、それが單なる据へ物でなく、實動そのものがそう云ふ形を取てゐるだけで、型を透き通して生命が發してゐる、偶像でなくて「如來さま」と呼ばざるを得ぬ如來である。

△即ち弓を型通り三段に引擡つてゐても型を型の爲めにめてゐるのではなく、一の刹那が弦を離れる刹那であつて、中不中の分れ目である、此極息が二六時中食てる時も寝てゐる時も通じて居ればいつも弓を引いてゐる事と同じである、だから何時どんな場合に處しても百發百中である、これが「骨」といふものであらう。

△信仰も特別な處での別時作行が此「骨」となつた時本當の信仰である事々刻々が皆眞劍道場であり、座禪念佛である。浮世離れた念佛でなく、念佛でなくては生きれぬ算盤道である。型の無い無相の念佛であるから、どんな姿ともなる念佛であ

る、各々の情態に於て念佛にならねばならぬ。
△だから先づ自分の胸へ向て弓を引く可きだ、第一の的を必ず射る事が出来るだらう、そして次から次へとの的が見えて來る、的の一つも見出し得ないやうな無神經者であつたら夢遊病者に過ぎぬ、宗教を呪ひ周圍を呪てゐる者は、呪ひ得ない者より遙かに大きな的を見出してゐる、だからその的を本當に射破ることだ、すると中から何かが出て來るに違ひない。

蠟燭は自分だけを照して人を照らさぬといふやうなケチな考を持たぬ、自分を照し乍ら人を照してゐる、いや人を照す爲めに自分をも同時に照し出してゐると云つた方が本當かも知れぬ、人を照らしたからと云ふて少しも自分を照らす分量が減て居らぬ。大きな光りだ。

國民の自覺

意 喜 知

今を去る七八年も前のことであつた。

諸國行脚と云ふ出で立ちで日蓮主義の一派を奉ずる大迫大將と伊豆凡夫當時少將が九州の北岸にある片田舎の唐津へ立寄られた。

土地の有志者は閣下等の講演を聞くべく町の小學校の講堂を借りて日蓮主義宣傳の講演會を開催し

たのであつた。

僕は其のとき圍碁の名人を以て國技館の土俵に立つて相手の力士を威嚇せんとするの滑稽を感ぜしめられないでもなかつたが時の辯説に於て大迫大將よりも伊豆少將が達者だと思つたが其の達者だと思つた伊豆少將の講演の一節に聞き捨てならぬ一語が私の胸底深く残された、夫れは戦死者の墓が日露戦役後幾年か世間でも戦死者の墓だと尊敬もし珍重がらもし又大切にもしたが戦後の歲月の經つと共に自然世間から忘れられて十餘年後の今

日となつては遺族の外に顧る者が一人もなくなつた。甚だしきは草芒々と荒れ果て、年に一回でも香花を手向ける者が在るか無いかを疑はれる様な有様である。こんな状態では今後再び異國と戦端が開かれるにしても喜んで君國のために身命を賭して戦つて呉れる者が無くなる依て少將閣下の希望として小學校の教師諸君にお願ひがある、年に一度か二度時候の良い時一級の生徒を卒ひて戦死者の墓前に参詣させ序にお墓の掃除や草むしりでもさせつゝ故人の勳功に付いて或は戦死當時の戦役に關するお話でもして忠君愛國の精神を鼓吹して下さつたならば第二の國民が喜んで君國のために身命を惜まずに盡して呉れるであらうと、是を聞いて僕は考へた大和魂の獨占者を以て自ら任ずる帝國軍人が死後墓碑の取扱ひが良いとか悪いとかで意氣が鈍ぶり、又出征を拒む様なことがあるだらうか、若しそんな軍人に帝國の國防を委せて安逸を貪るやうなことがあつたならば帝國の前途は如何であらうか、しかも我れ日本國の眼目とならん、我れ日本國の柱とならん、我れ日本

國の大船とならんと喝破した聖日蓮の主義を奉ずると言ふ小將の口より此言を耳にするのは意外の感がしてならない、否やそんな馬鹿げたことがあるものか、僕に忠君愛國の誠がある以上は帝國民から大和魂が阻喪することは斷じて無いと、知己や友人に悲憤を漏らして居たが、其の後上京して大正十三年の夏、計らずも某休職陸軍中佐と時局談に花を咲かせた。

某中佐殿は日角沫を飛して政局を慷慨された、政府當局は徒らに民衆に媚ひ又元老に媚びて爲政者自身の私慾を逞ふする外に何等卓越する見識もなく多くの代議士は窃かに金權者と握手しながら口に綱紀肅正とか産業立國とか美詞を並べて國民を瞞着し、一方民衆は政黨員と私交をまじえ不淨の財を積むに餘念なきか、さなくば不勞享樂を追ふて安逸を貪り國を擧げて墳火口上亂舞の状態だ。僕は問ふた、こんな時日米戦争でも起つたならば如何になるでしやうかと、

戦ひの時は國家の干城だと煽てられて身命を賭して戦つた軍人を一旦平和克復するや軍人は無用の

長物だと罵じつて放逐する例ひ放逐までに至らぬ時は洋服とサーヘルを持たせて置けば明日首が飛ぶのも知らないで喜んで遊んで居ると嘲り笑ふのである。

我々一人前の軍人に成るにも幼少の時から志を立て、陸軍大學を出るまでには相當な財産も用るし尊き人生も夫れにぶち込んでかゝらねば出来ない夫れに戦争があるから直ぐ来い、平和になつたからいらぬ、と放逐する、こんな取扱ひをされて如何して眞面目に忠君愛國と戦線に命を的に向ふことが出来やうか、其の時になつて眼が醒めるであらうと。

七年前に伊豆小將の講演を聞いて悲憤を漏した僕も今更の様に中佐の私言を聞き又中佐の言葉を通して帝國軍人の意中を思ふ時に啞然たらざるを得なかつた。

然し某中佐を早計に非國民だ陛下の赤子にあらずと斷する勿れ。

いやしくも如來の本願に乗托して自己を完成し延いては社會の改造を絶叫せんとする吾人は深く深

く内省しなければならぬ、彼等に斯く言はしむべき必然性か此方にあつたのではなからうか、左傾の徒は公々然と群衆の前で軍人を罵つた群衆は之に和したでないが、右傾の徒は惰眠の状態にあつて神國たるの所以を知らず又知らうともせず我々が日本は神國だと威張つた、是れは古き過去の出来事のみでない今も尙ほそんな奴が往々にして見受けられる又一方軍人は軍人で自分等が出征して此方が勝てば自分一人の手柄の様に傍若無人に我が忠良なる臣民を侮辱する様ではなかつたであらうか。

此所まで私の片言交りの駄辯を聞いて下さいました賢明なる道友諸士よ、國民思想が如何なる傾向に動きつゝあるかは既に御承知の事で駄辯を弄するまでもありません又外敵は刻一刻に經濟戦に民族戦に迫りつゝあることも周知の事實であります。

優勝劣敗適者生存の言葉は生存競争場裡の哲理であります。

思想戰經濟戰民族戰場裡に立ちて戦ふ者は各自あ

るのみであります。私あるのみであります。私自
身が腕を束ねて觀戰氣分に居て誰れが闘士となつ
て戦つて呉れるでありませうか、我が大和民族
は天神の子孫である天神の使命を帯びて此の土に
天降つた地上の神である。即ち如來の本願に乘托
して彌陀の淨土を地上に建設せんとする菩薩道に

一四
精進すべき佛子である筈だ。此の理想を實現せん
として遠く神代よりして建國せられし我が帝國の
神州たるの所以を極めて確呼たる信念の元に脚下
より開拓の鍬を打ち込んで眞生の道に精進し、且
又眞生同盟の下に結團しやうではありませんか。

大正十五年一月清水實相寺
別時結衆芳名錄

神奈川縣浦賀町 石井庄太郎
大阪市天王寺區 年宗亮三
大阪市此花區上福島北一丁目 藤村健三
同市同區西島町北港住宅 野田三郎
同市天王寺區生玉寺町月江寺 堀江榮子
同市同區伶人町五一 中川孝子
神戸市生田町三ノ三十五ノ二 秋葉鑑次郎
大阪市天王寺區東平野町貞松院方植 野久一
静岡市住吉町 藤井貞邦

東京府中野町桃園三三四二
三重縣飯南郡大石村
愛知縣海部郡南陽村
神奈川縣浦賀町吉井
神奈川縣久里濱村八幡
静岡市譽田町
大阪市東區平野町
静岡市
沼津市淺間町
同
同
同
横濱市海岸通五ノ二十

望月貞子
谷口年泰
熊澤國弋
吉田ソノ
長島岩吉
堀田良謙
杉本壽延
田中總輔
辻眞之丞
安藤壽喜治
戸谷幸吉
山崎作藏

愛知縣海部郡佐屋村佐屋 黒宮平八
同 佐藤忠義
同 眞野眞
三重縣津市上濱町 阿部喜兵衛
名古屋市中區御器所町布池五ノ一 尾上銀子
沼津市淺間町 辻 義
同 淺野順市
同 葛谷繁雄
同 大橋喜代三
同 藤村よね
同 飯塚まつよ
同 中野善英
同 神谷善之進
同 畑田はつ
同 小倉彦六
同 粟生來治
同 小野寺榮子
同 中村康隆
同 中村和子

清水市清水
同市入江受
同 眞野眞
同 阿部喜兵衛
同 尾上銀子
同 清水受
同 清水中町
同 清水受
同 清水新道
同 清水新道
同 清水受
同 清水
同 同市入江町二丁目
同 同市入江町三丁目
同 同市清水
同 同市清水
同 同市清水實相寺
同 同市芝公園十四號ノ九(導師)

中村くら
鈴木まさ子
佐々木清志
佐々木はつ子
久我尾正治
久我尾春子
小川なみ
齊藤はつ
櫻田國藏
櫻田英子
鈴木英雄
松永兼吉
松永みづ
松本龜治
松本かね
遠藤やす
中田清齊
中田義孝
藤下三作
山本三
友松三
中村辨眞
土屋觀道

今度静岡縣清水港に於ても眞生同盟の發會あり、参考の爲めに其の要領を掲ぐ。

眞生同盟

趣意綱領規約

眞生同盟清水支部

(事務所 清水市清水電相寺内 電話三番四二二番)

趣意書

無限に廣がれる大宇宙の一角に立ち、無限に連らなれる永劫の一瞬時に生き行く一個の人間としての私達夫れは單なる一存在に非らずして潑瀾たる一生命として祖先よりの結晶であり、過去に逝きし凡ての時間と、凡ての空間との總勘定である事を知ると共に、假令小なりと雖も自己の尊貴と自己の使命とに驚歎せずには居られません。而して更に社會として現はれ、國家として現はれ森羅萬象として現はれつゝ、此の一個の生命を生かし行く大宇宙の大恩寵に報いんと願はずには居

られません。此故に私達人間が、人間として生きるを欲しなれば兎一角、生くるならば眞に生くべきであり、覺醒を欲しなれば兎に角、覺醒するならば眞實に覺醒す可きであり、起つを欲しなれば兎に角立つならば眞劍なる價値の生活に立つ可きではありませんか。

茲に私達の本當の生命があり、本當の喜びがあり本當の力が自覺されるのであります。然かも本當に生きたる私達は、失張り全體の中の一なるが故に、全體と共に清まり行き、醒め行き、改められて行きしなれば本當に生くる神の世界、生くる佛の世界は顯はれないと思ひますかうした意味から茲に、眞實に生き行くものが二人となり、三人となり、五人となり十人となり、全體となり行く可く此同盟が結ばれたのであります。オ、一人眞實に生くるところ一家榮え、一家生くる處一市榮え、一市生くる處一國榮え、一國生くる處大宇宙は榮え行く事を信じて疑ひません。

此故に私達は微小なりと雖ども、衝天の意氣と壯嚴なる正義とを感得せざるを得ないのであります。願くは兄弟よ姉妹よ、共に俱に手を携へて眞實の道に生きやうではありませんか。

綱領

私達は天地に充つる大生命に覺醒しつゝ、常に眞劍と眞實とを以て、正しく生くると共に、未だ醒めざる兄弟姉妹を立たしめ、相携へて成就衆生の大業を達成したいと思ひます。

規約

- 一、本同盟を眞生同盟清水支部と稱す。
- 二、本同盟は眞實に生きんとする者のみを以て組織す。
- 三、本同盟は自己の弊習を打破し職業を尊重しつゝ、社會の革新國家の恢興を計るべく左の事業をなす。

- 一、公開講演會
- 二、修養會

- 三、研究討議會
 - 四、讀書會、附簡易圖書館
 - 五、パンフレット刊行
 - 六、良品廉賣
 - 七、其他社會の福利を増進す可き事項。
- 四、本同盟には左の部門を置く、
- 一、宗教部 (精神的方面を主とするもの)
 - 二、經濟部 (物質的方面を主とするもの)
 - 三、文書部 (文書宣傳を主とするもの)
 - 五、本同盟に加盟せんとする者は貳名以上の紹介を要す。
 - 六、本同盟の經費は會費、寄附金、並に特別收入金を以て之に充つ。
 - 七、本同盟の内規及び寄附行爲規程等は別に之を定む。

内規 (抜抄)

- 一、本同盟 盟友の會費は當分の間壹ヶ月金貳拾錢以上とす。
- 二、本同盟 盟友の會合日は當分の間左の如く定む。
- 一、修養會 毎月五日、十五日、廿五日の各夜
- 二、研究討議會 第一土曜の夜
- 三、讀書會 第三土曜の夜

行基寺別時三味會案内

時、四月十一日より、七日間。前日までに登山のこと。
所、岐阜縣海津郡城山村行基寺。(養老線山崎驛下車約二十町)

導師 土屋道觀師

行基寺の三味會は眞道生友の三大別時の一であります。遠く人家を離れ、深く三味の妙境に生くるには此上もない雲上の世界であります。四月十日午後四時頃までに山崎驛まで出迎あります。

觀道旅行日記

- 三月十四日 道中。
- 同 十五日 神戸極樂寺
- 同 十六日 尼ヶ崎市圓平寺。
- 同 十七日
- 同 十八日 大阪市專修院

- 同 十九日 名古屋崇徳寺、向上婦人會
- 同 二十日 同 三味會
- 同 二十一日より五日間 岐阜縣海津郡高須町圓心寺。別時三味會
- 同 二十五日 夜分。大垣市にて講演會
- 同 二十八日より、三日間 神奈川縣浦賀町吉井眞福寺念佛三味會

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所 眞 生 社

編輯兼 土 屋 道 觀

發行人 土 屋 道 觀

東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷人 三 井 清 次

東京市芝區三田四國町二番地三地

印刷所 精進堂印刷所